

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.32 平成6年10月31日



方形周溝墓（古墳時代前期）
多摩ニュータウンNo.200遺跡
町田市小山

三十年間の成果

常任理事 有坂 晃

四月一日付で現職に就任し、久しぶりに当センターにある展示ホール室を見学した。

南関東最古の五万年前の旧石器、縄文各期のおびただしい数の土器、近年発掘された弥生時代の土器、更に、古墳時代、奈良・平安時代の土器、瓦、木器等が所狭しと陳列されている。

また、展示室前の広い廊下にある展示コーナーには、近年発掘された旧汐留貨物駅跡、尾張藩上屋敷跡遺跡及び板橋区の菅原神社台地上遺跡等の調査成果が展示されている。

来年で、多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査が開始されて三十年になる。これらの展示品は、この間において発掘調査に従事された方々の汗の結晶である。

多摩ニュータウンの発掘調査も後数年で終了する予定である。三千ヘクタールという日本では例をみない多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査の成果を、学問的にまとめることが、今後の課題と考える。

また、東京都において、新しい博物館を一日も早く計画し、これら三十年間の貴重な成果をそこに展示し、より広く都民に公開することを期待したい。

遺跡だより 39

多摩ニュータウンNo.200遺跡



方形周溝墓

町田市小山にあるNo.200遺跡は、多摩川水系と境川水系との分水嶺（通称戦車道路）から南へ伸びる尾根上及び、その南側斜面に位置しています。昭和63年度に第一次調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓1基と、多数の縄文時代早期の遺構・遺物が検出されました。今年度は、前回の隣接部分を調査しており、今回はこれまでに見つかった遺構・遺物について紹介します。

現在のところ、古墳時代前期の遺構を中心に調査中で、方形周溝墓3基、竪穴住居跡約30軒、掘立柱建物跡2軒をはじめ、縄文時代

早期や近世以降の遺構を確認しています。

方形周溝墓は前回調査のものも含め、尾根上に並んで位置しており、この地域の有力者が代々にわたって営んだものと思われれます。規模は一辺約11mのものが2基、約7mのものが1基で、周溝も周辺にすべて巡るものと、隅の一つが切れるものがあります（前回調査のものは、一辺約10mで周囲すべてに周溝が巡ります）。出土遺物は、1基から壺と鉢の破片が出土しているだけですが、その1基では主体部を確認しており、これからの遺物が出土する可能性があります（前回調査でも主体部が確認されており、鉄鍬2・ガラス玉1が出土しています）。

竪穴住居跡群は、尾根の先端部と斜面のやや平坦な部分に密集しています。また住居跡の分布しない所には、掘立柱建物跡があります。この遺跡の住居跡の特徴は、火災に遭ったものが

多いことで、およそ3/4が火災住居です。中には屋根を葺いた葺状のものと柱材が、炭化した状態でそのまま検出された住居跡もあります。これらの火災の原因が失火によるものなのか、あるいは住居を廃棄する際の儀礼などに伴うものなのかは、はつきりしません。

住居跡の規模は、一辺4〜5mのものがほとんどですが、中には7mをこえるものもあり、最大のものも9m×7mの規模があります。これら大型の住居は、集落内の有力者が居住したものと想像され、尾根上に並ぶ方形周溝墓群との関わりが注目されます。

住居跡からは土器・石器・鉄器類が出土していますが、量はあまり多くありません。これは、住居を廃棄する際に持ち去ったせいなのかも知れません。しかし中には多くの遺物を出土するものもあり、例えば33号住居跡では、床面から写真のような状態で土器が出土しまし

た。特に右上の壺は、柱を抜いた後の穴に壺を入れ、さらにその上から別の壺を被せていました。これらの土器は赤く塗られており、日常生活では用いない特別なものです。こうした状況は、住居を廃棄する際に儀礼があったことを想定させるものです。

近年の相原・小山地区の調査により、これまで多摩川水系では見られなかった

古墳時代前期の遺跡が、境川水系で次々と見つかってきます。No.200遺跡周辺もその一つで、全部で200軒近い住居跡と、



33号住居跡の土器出土状況

方形周溝墓、木器の未製品を出土した水場などが見つかっています。中でも方形周溝墓を持つこの遺跡は、その中心地であったといえるでしょう。これから行う縄文時代の遺構の調査も含め、No.200遺跡の調査は多摩ニュータウンの昔の人々の暮らしについて、さらに沢山の情報を私たちに与えてくれることでしょう。

（大西雅也）

遺跡だより④



丸の内三丁目遺跡

水道施設

東京都千代田区丸の内にあった旧都庁舎はその解体の後、この跡地に多目的な国際フォーラムが建設されることになっていました。当地は江戸時代、武家屋敷地であったため、試掘調査を行ったところ、地下室のあった庁舎以外の部分、約1万㎡の範囲に、江戸時代初期からの遺構・遺物が遺存していることが明らかとなりました。後に「千代田区丸の内三丁目遺跡」と名付けられたこの遺跡は、国際フォーラムの建設で完全に破壊されてしまうため、事前に発掘調査が行われることとなりました。遺跡は

豊富な内容が予想され、また試掘調査からもこれを裏付ける結果を得ており、かなり長期の発掘期間が必要と判断されました。しかし、実際には建設計画を大きく遅らせることは出来ないとの建設担当部局の主張に従い、準備に4か月、本調査9か月という発掘期間となりました。これは発掘担当調査研究員が、必要と考える期間の半分以下の日数で、非常に厳しい条件の発掘となりました。

さて、当遺跡は徳川家康が江戸入りした頃は、「日比谷の入江」の一部分でしたが、慶長8年(1603)、神田山を切り崩し、入り江を埋め立てる大工事が行われ、造成されました。こうして造成された鍛冶橋門内・大名小路にある当遺跡には、同時期に6家ほどの大名・旗本の屋敷が立ち並んでいました。これらの大名・旗本は、改易・屋敷替えなどにより、当地を去り、あるいは移って来る

など、しばしば入れ替わり、元禄11年(1698)までの90年間に、およそ20の家が当地に屋敷を構えました。この中には土佐の山内一豊、屋敷内で部下に殺害される幕府勘定頭伊丹勝長、贖金造りや、権力をかさに、人の女房を無理やり奪い取るなどの悪事を重ねていた長崎奉行竹中重義に連座した弟重信、3代将軍家光の死後、所領を返上して出家し江戸市中を托鉢して回った松平定政などがいました。これら各家の屋敷境には、幅1間の石垣の溝が造られており、この溝の中から、初期伊万里や肥前系の陶器、京焼など、他遺跡では出土例の少ない、貴重な遺物が多数出土しています。このうち毛利市三郎と伊丹勝長との屋敷境の溝からは、国宝の色絵藤花文茶壺や色絵雉香炉などで有名な、野々村仁清の印銘が入った碗が出土しています。仁清の作品はいずれも伝世品で、発掘調査により出土した例は

ほとんど知られていません。希に出土して、贖作であったりします。当遺跡から出土した碗は、慎重な検討の結果、仁清の作品と見て間違いないと思われず。抜群のろくろ技術と、やや灰色がかった白色の釉が見事な作品です。元禄11年(1698)、当地一帯は大火により焼失し、これ以後、当遺跡は南側が阿波藩、北側が土佐藩の上屋敷となり、1700年後の明治維新に至ります。土佐・阿波両藩邸の境の溝からも、上記同様、大量の遺物が出土しています。なかでも、お酒などの売買に使われた貧乏徳利は、完形品だけでも400本以上が出土しました。底部に屋号などが書かれることが多いのですが、この中に、1本だけ「坂本」と書かれた物がありました。土佐で坂本といえば、そう坂本龍馬です。これが龍馬の徳利ではないかと想像を逞しくして、残されている龍馬の書簡から坂本の記名を捜し、比較してみました。が、書簡は草書、徳利は楷書の為、判然としません。また龍馬は築地の土佐藩下屋敷に居た時期があつたことは分かっているのですが、この鍛冶橋の上屋敷に居たかどうかは不明です。このほかにも当遺跡からは、貴重な遺構・遺物が大量に出土しています。しかしこれらは、すでに記したように、発掘期間があまりにも短かつたために、すべてを調査することは出来ませんでした。当地一帯は、現在ではビルが立ち並び、これにより、ほとんどの埋蔵文化財は破壊されていると考えられます。このため、今後付近で、このような遺跡を発掘調査することは出来ないと思われれます。この意味において、当遺跡の発掘は重要であった訳ですが、不十分な結果となり、残念でなりません。

(栗城譲一)

縄文土器作り教室

8月3日(水)、4日(木)、25日(木)の3日間にわたって行われました。当教室の参加者はあらかじめ申し込みのあった多数の都民の中から抽選で決定された29名の方々です。

2日間で、実物の縄文土器を観察しながら、粘土から整形された土器を作り、



最後の日に遺跡庭園で土器を焼きました。

今回で7回目を迎えた教室ですが、初めて夏の開催でしたが小学生の参加もあり、77歳から8歳までの老若男女、バラエティーのあるメンバーで予定どおり楽しく終えることができました。

木皿作り見学と
映画鑑賞会

映画鑑賞会

映画「奥会津の木地師」の上映と約120年前の木皿製作のためのろくろを復元、展示してありますが、そのろくろを実際に使って木皿をつくる作業の見学会を開催しました。ろくろ研究家の金井晃氏がカンナを挽き、総務課の続光範副主査が綱を曳きました。

縄文土器の焼成

32名と少数の参加でしたが、じっくりと見学し、カンナを挽く金井氏に質問したりでき、落ち着いた雰囲気でした。



木皿作りの実演

文化財講演会

9月20日(火)午後6時30分から中国社会科学院考古研究所の研究員で、現在東京大学文学部に留学中の朱延平先生による講演「遼西考古学における新発見と研究の課題」が行われました。参加者は87名でした。

10月2日(日)午後1時30分から筑波大学歴史人類学系前田潮先生による講演「オホーツク文化の集落」が行われました。

実際にオホーツク文化の集落跡から発見された骨角製品も示しながらのお話でした。参加者は70名でした。



講演する前田先生

汐留遺跡見学会

当センターが調査を行っています。港区東新橋、汐留遺跡の見学会が10月1日(土)午前11時から午後3時にかけて行われました。この遺跡は「旧汐留貨物駅跡地内遺跡」とされているところです。

兵庫県の龍野にあった脇坂家上屋敷と仙台の伊達家上屋敷を区画する屋敷境の堀、伊達家上屋敷の御主殿および庭園の一部が見学の対象となっています。とくに伊達家上屋敷の舟寄場には見学者も驚きの声をあげていました。参加者は760名でした。



汐留遺跡見学会

職員 海外研修

職員海外研修として、9月12日から17日にかけて、5名の職員が全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東地区訪中団の一員として参加してきました。中国の北京、西安の社会科学院の考古研究所などを中心に研修を行いました。石井則孝調査研究部長、岩下博明庶務係長、原川雄二、竹花宏之、小葉一夫副主任調査研究員の5名がメンバーです(その概略については次号でご紹介します)。

人の動き

8月1日付けで、森久保啓二所長が当財団事務局長へ転出しました。後任には情報連絡室から梶井稔所長が就任しました。



発行

(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
平成6年10月31日